青森県の初代民選知事

津島文治

——「井戸塀政治家」の歩み——

補論２—津島文治・修治・康一

藤 本 一 美

〈総目次〉

序文
第一章　津島文治の政治経歴
　１　はじめに
　２　初期の経歴
　⑴ 家系と学歴
　⑵ 金木町長・県会議員
　⑶ 衆議院議員当選辞退
　３　青森県知事
　⑴ 知事一期目
　⑵ 知事二期目
　⑶ 知事三期目
　４　衆議院議員および参議院議員
　⑴ 衆議院議員時代
　⑵ 参議院議員時代
　５　おわりに—「政治家」津島の評価
（『(専修大学) 社会科学年報』第50号〔2016年〕）
第二章　選挙運動
　１　はじめに
　２　県会議員選と衆議院総選挙
　⑴ 1927年９月の県議選
　⑵ 1935年９月の県議選
　⑶ 1937年４月の衆議院選
　⑷ 1946年４月の衆議院選
　３　知事選挙
　⑴ 1947年４月の知事選
　⑵ 1950年９月の知事選

⑶ 1954年11月の知事選
4　衆議院総選挙
⑴ 1958年５月の衆議院選
⑵ 1960年11月の衆議院選
⑶ 1963年11月の衆議院選
5　参議院通常選挙
⑴ 1965年７月の参議院選
⑵ 1971年６月の参議院選
6　おわりに
（『（専修大学）法学論集』第133号〔2018年７月）
第三章　「津軽選挙」
1　はじめに
2　金木町長選挙―開票不正事件
3　鰺ヶ沢町選挙―二人町長事件
4　中里町長選挙―投票所乱入事件
5　おわりに
（『臨床政治研究』第７号〔2017年10月〕）
第四章　選挙（政見）公約
1　はじめに
2　町長・県議選
3　衆議院総選挙
4　県知事選
⑴ 1947年の知事選
⑵ 1950年の知事選
⑶ 1954年の知事選
5　衆議院総選挙
⑴ 1958年の衆議院選
⑵ 1960年の衆議院選
⑶ 1963年の衆議院選
6　参議院通常選挙
⑴ 1965年の参議院選
⑵ 1971年の参議院選
7　おわりに
（『臨床政治研究』第８号〔2018年10月〕）
第五章　「行政最高責任者」：津島文治
1　はじめに
2　金木町長
3　青森県知事

⑴ 一期目
⑵ 二期目
⑶ 三期目
4　おわりに
第六章　津島県政下の事業
1　はじめに
2　成功事例
⑴ 財政再建と機構改革
⑵ 県西電源開発
⑶ 目屋ダム
⑷ 県立中央病院と県立図書館
3　失敗事例
⑴ 企画室構想
⑵ 青森県営競馬
⑶ 空券事件
⑷ リンゴ振興会社
4　おわりに
第七章　国会議員：津島文治
1　はじめに
2　衆議院議員
3　参議院議員
4　おわりに
補論1　「文人」：津島文治
1　はじめに
2　戯曲：「奪い合い」
3　短編：「めし」
4　評論：「肉親が楽しめなかった弟の小説」
5　おわりに
（『日本臨床政治学会，ニューズレター』第13号〔2018年5月〕）
補論2　津島文治・修治・康一
1　はじめに
2　津島文治と弟・修治（太宰治）
3　津島文治と長男・康一
4　おわりに
（『専修大学法学研究所所報』第57号〔2018年9月〕）
結語
＊主要参考文献―文献解題
＊初掲誌一覧

＊資料１　津島文治・履歴年表
２　津島文治の親族
＊索引（人名・事項）

補論２―津島文治・修治・康一

１　はじめに

津島文治（1898年１月20日〜1973年５月６日）

青森県の初代民選知事である津島文治の父・津島源右衛門と母・たねは，生涯11人の子供を設けている。文治は五番目の子で，兄たちは早くこの世を去った。そのため，三男坊であった文治は，源右衛門が1923年３月４日に死去するや，直ちに，家督をつぐ羽目となった。文治25歳の時である。

文治の下には，四男の英治，五男の圭治，六男の修治（太宰治），および七男の礼治がいたものの，圭治の方は東京美術学校を卒業して間もなく亡くなり，礼治も死去した。英治は，文治と同じく，後に金木町の町長を務めた。一方，入水自殺した修治は1909年に生まれている。文治は修治より11歳年上で，後に著名作家として知られる修治は，「兄たち」という一文を残しており，その中で文治のことを描いている。それでは，修治こと太宰治は長兄・文治をどのように見ていたのであろうか。それが，本論の基本的課題の一つである。

文治は妻のれいの間で，３人の子供に恵まれた。男子は康一 一人のみで，後は女二人である。長男の康一は，一人息子であったので，父の後を継いで政治家になると思われた。しかし実際には，演劇俳優の道を選んでいる。本論のもう一つの課題は，息子の康一が父の文治をどのように見ていたのかをさぐる，ことである。

本論では，津島文治の家族を対象にしている。論述は前半で，修治＝太宰が執筆した「兄たち」に依拠しながら，文治と修治，つまり，太宰治との関係を検討する。後半では，長男・康一の父・文治の思い出を中心に論じたい。

親族といえば，太宰の未亡人の津島美知子は，金木に疎開していた頃を思い出し，

長兄の文治が「甘党で，家長として女子供へのいたわりに満ちた一言」について，回想録にしたためている。また，“おかあさん”と妻を愛情こめて呼んでいた文治は，れい夫人を大切にしていた。それは残されている，二人のスナップ写真を見れば察しがつく。政治家の妻として苦労されたれい夫人について，詳しく触れることが出来なかったのは，本稿の欠陥の一つである。息子の康一は，母のことを“きつい”ところはあったが,「これは耐えて耐えて，耐えきった人なんじゃないですか」[1)]，と述懐している。

れい夫人は，青山学院女子専門部を卒業後17歳にして，津軽の大地主，津島家に嫁いだ。月並みなの表現をするなら，長兄の妻として，また政治家の妻として，苦労が絶えなかったことであろう。その心中は察してあまりある[2)]。

2　津島文治と弟・修治（太宰治）

津島修治こと太宰治は，長兄の文治のことを「兄たち」の中で，次のように描いているので，まず冒頭で紹介しておこう。

いわく，「父がなくなったときは，長兄は大学を出たばかりの25歳，次兄は23歳，三男は20歳，私が14歳でありました。兄たちは，みな優しく，そうして大人びていました。私は，父に死なれても，少しも心細く感じませんでした。（何故なら）長兄を父と全く同じことに思い，次兄を苦労した伯父さんの様に思い，甘えてばかりいました」，と最初に家族のことを記述している。

その上で，「長兄は25歳で町長さんになり（27歳の誤りでは？），少し政治の実際を練習して，それから31歳で，県会議員になりました。全国で一番若年の県会議員だったそうで，新聞には，A県の近衛公とされて，漫画なども出て，たいへん人気がありました」，と説明。

そして最後に，太宰は長兄文治のことを心配しながら，次のように忖度している。「長兄は，それでも，いつも暗い気持ちのようでした。長兄の望みは，そんなところに無かったのです。長兄の書棚には，ワイルド全集，イプセン全集，それから日本の戯曲家の著作が，いっぱい，つまって在りました。長兄自身も，戯曲を書いて，ときどき弟妹たちを一室に呼び集め，読んで聞かせてくれることがありました。そんな時の長兄の顔は，しんから嬉しそうに見えました」と[3)]。

ただ，その一方で，太宰は文治のことを「私は，未だ中学生であったけれども，……兄を，たまらなく可哀相に思いました」，と同情を寄せている。その理由は，「A県の

近衛公だなどと無智なおだてかたはしても，兄のほんとうの淋しさは，誰も知らないのだと思いました」，とおもんばる[4)]。

そんな修治は，兄の文治の性格について，「癇癖の強い兄」だと表現している。実際，太宰は東大仏文科卒業の見通しが全くたたないことを文治に見破れてしまい，文治が定宿にしている神田の関根屋に呼びつけられ，一度，ひどく怒られた過去がある[5)]。

戦後間もない1946年３月，長兄の文治は衆議院議員に立候補した。その際，金木町に一家で疎開していた太宰も，選挙応援を買って出ており，その時の様子を次のように，語っている。

「私は家にいろいろな迷惑をかけてきた。ことに長兄にはあわせる顔がないほど，迷惑のかけ通しだった。いま金木に疎開しているが，長兄が衆院選に出ることになり，黙っておれない。できることなら，兄を支援してほしい。私は津軽を回り，訴えていくつもりです」[6)]。

この時，太宰は，文治のおさがりのグレイの背広，紺のコートを身にまとい，リックサックを背負い，嘉瀬，五所川原，木造，および鯵ヶ沢などの選挙区を歩き回った，という。もちろん，それは，長兄文治の選挙応援をかねて，座談会や色々な催しに出るためであった。

文治の長男康一も，太宰が選挙に関わり，文治の原稿を手直ししたり，“サクラ”となって演説会に赴き，拍手喝さいしたことを，話している。戦後に至り，太宰は文治のために人肌抜いだのだ。というのも太宰は，これまでの数々の“無頼な振る舞い”をしでかしてきたので，それを清算したかったのでなかろうか？　ただ，筆者は，太宰研究家でないので，真意の程はよくわからない。

それから，２年３ヵ月後の1948年６月，太宰は玉川上水で，愛人の山崎富榮と入水自殺をしでかす。その理由をめぐって憶測を呼んだ。だが，1998年に遺族らが公開した遺書で，「小説を書くのがいやになったから死ぬのです」，と自殺の動機が明らかにされた[7)]。この事件は，夫人はもとより兄の文治にとっても，迷惑千万なことであったことは，いうまでもなかろう。津島文治はこの時，青森県知事に就任して二年目であり，実弟の自殺は大きなショックであった。文治はその後，死亡の直前まで太宰に関するインタビューには一切応じていない（詳細は，補論１　「文人：津島文治」参照）。

津島文治は，太宰治の小説に話が及んだ際，弟に次のように注意を喚起している。

「わしはよく弟に話したものだ，あまり乱作してはいけない。一作毎に立派なものを書

き，作品の内容を向上させなければならぬと。やたらに書き続ければ，とかくマンネリズムに陥る。小説家はとかく沢山書けば，それだけ収入が増え，いい生活が出来るのだが，それよりも生活をきりつめて，一年にひとつでもいい，じっくりと考えていいものを書くことだと」[8)]。

至言である。筆者自身も乱作気味なところがあるので，胸に響く一言である。留意しなくては，と思う。

3　津島文治と長男・康一

津島文治が黒石の名門岡崎家の娘のれいと結婚したのは，1922年５月のことである。当時文治は23歳で，早稲田の大学生であった。れいは青山学院女子専門部をでた才媛で，17歳の時だった。既述のように。津島夫妻は三人の子供を設けた。男子の康一一人と，女子は陽と滋の二人だ。陽は衆議院議員・田澤吉郎に嫁ぎ，滋は国の研究所技官の下に嫁いだ。

長男の康一は，弘前高校を出たあと，地元の弘前大学に進学，演劇に興味を抱き，俳優座に入り俳優として活躍している。父の文治は当初，康一を政治の跡継ぎにしたかったようだ。だから，文治は，康一が演劇の方に進むことに，反対した。その理由は，「津軽弁で（役者に）なれるわけがない」からだという。だが，父に内緒で俳優になったこと知られてしまい，文治は「本人にまえせる」しかないと思い諦めた。実際，康一自身父に対して，「政治はやらないよ」と言っていた。しかし，文治の方も「一度でも，政治家になれといったことはないじゃないか」，と応じている[9)]。

1931年生まれの康一は，いわば津島家の没落時代に青春を過ごした，と言ってよい。康一にとって，大地主の家が，相次ぐ選挙で次第に傾いていくのが堪えられなかったのであろう。康一はいう「十幾度に渡る選挙。そしてそのために三度も引越をしなければならなかった父。その父の為，選挙はおろか，私的な引越さえ一度も手を貸したことがない不肖の子」，と己を責める。

父文治が死去したとき，親族会議で「津島家としては，責任ある残りの任期を，跡取り息子である康一君にやってもらえば，同情票も集まるし，党本部も公認するだろう」，と決めた。だが，康一の方は「お話はありがたいが，私は役者の道をやめるわけにはいきません。仮に出たとしても次の選挙には出ない。これでは政治の冒瀆だから，私は絶対に出ない」と答えた[10)]。

父親の文治に対して，康一はあまり良い感情を抱いていない，かのようだ。だが，康一は文治が浪人時代の戦前，父がはじめて旅行に連れていってくれたことを殊の外に喜んでいる。初めて，北海道や十二湖に連れて貰ったことを，鮮明に覚えており，父に感謝の念を示している[11]。文治の方は，上京した時，時間を見つけて妻のれいを伴い，康一の芝居をこっそりと見学に出かけている。息子には甘い親の姿が浮かんでくる。親ばかとでも，いうべきか。

振り返れば，明治の初め，油売りから身をおこした曽祖父惣助，そして，ヤマゲンの家風を築いた父源右衛門。例え，時代の大きな流れがあったとはいえ，文治は先代たちが残した財産を全て選挙に投じて，食いつぶしてしまった。だから，息子の康一にも一切，遺産を残していない。康一の方はそれで構わない，と言っている。そして，本家津島家の血統は康一でもって絶える。康一には子供がいないからだ[12]。

4　おわりに

太宰治こと，津島修治は家父長であった文治の全面的な庇護の下で，多額の生活費を送金してもらいながら，東京で小説を書き続けることができた。羨ましい限りである。文治は，太宰がどんなことをしでかしても，みごとに跡始末をしてくれる「絶対的保護者」であった[13]。太宰にとって，長兄の文治は，家長であり，事実上の“父”であったのだ。

一方，文治の長男である康一は，弘前大学時代に演劇部に入り，在籍する芝居仲間に誘われるままに，家出同然に東京に飛び出し，劇団俳優座の門をたたいている。結婚も親には内緒だったという。あっぱれな行動である，というべきか。それとも，選挙に明け暮れる父とは距離を置いて，津島家から自立したかったのであろうか[14]。筆者にはわからない。本人に聞くのも失礼であろう。

ただ，ここで述べておきたいのは，修治も康一の両人とも，いずれも，最後まで長兄の文治から，文治が死ぬまで“金銭”を貰っていたこと，である[15]。よい身分だというより，いいようがない。ただ，人のことは言えない。筆者自身も大学院の博士課程まで進み，27歳まで送金してもらっていたからだ。6年前に亡くなった私の母親を含めて，生涯，「井戸塀政治家」で通した文治のすねも，細るわけである。親とはありがたい者だと，つくづく思う。

最後に，次のような，長男・康一の発言で本章を閉めたい。康一は父親の気性の激

しさに言及した後で，（大地主の息子であった）「おやじが政治に金をつぎこんで，財産をなくしたのも，百姓から吸い上げたものは津軽の人びとに還元すればよいという考えだったかもしれません」と述べ，政治家・津島文治に対して，最大級の評価を与えている。羨ましい親子である[16)]。

1) 津島康一＝東郷克美「太宰治と津島家の人々」『国文學研究―解釈と能率の研究』（1987年１月号，54頁），「夫の文治は政治に金をつぎんで，４，５万円の知事給与すら家に入れない。反対に持ち出していってしまう。……夫に従順なことが美徳として教えられた明治生まれの女ゆえの姿だった」。れいは旧家で娘として大切に育てられ，津島家に嫁いでも，自分で買い物に行かず，物の値段もわからなかった，という。しかし，家に金がないことは悟られないように，していた（秋山鴻太郎＝福島義雄『津軽家の人びと』〔朝日ソノラマ，1981年〕，184－185頁，鎌田慧『津軽・斜陽の家―太宰を生んだ「地主貴族の光芒」』〔講談社，2003年〕，24－25頁）。

2) れい夫人は，1972年７月，中風にかかり病院に入院していたので，文治の面倒をみることが叶わず，そのため，夫の死期にも立ち会うことができなかった。れいは文治の遺体を目にし，不自由な足を折って文治の枕もとにすわり，自由のきく右手でその頭から額をなぜ「すみませんでした」，とたった一言発した（成田要次郎「おどさあッ」『清廉一徹』〔筑摩書房，1974年〕，282，296頁）。れい夫人は２年後，文治を追うように亡くなった。

3)「兄たち」『太宰治全集　４』〔筑摩書房，1998年〕，142－143頁，（　）内は筆者，兄文治に関しては，「思ひ出」の中で，同じように言及している（「思ひ出」『太宰治全集　第１巻』〔筑摩書房，1989年〕，19，34頁）。

4) 同上，144頁。

5) 鎌田・前掲『津軽・斜陽の家―太宰を生んだ「地主貴族の光芒」』，注１）267頁，しかし，二人は兄弟であったので，仲良く街に出かけることもあったし，酒を飲みかわすこともあった。一般の家庭のように，肉親の情は存在した。

6) 田中美知子「28年前」前掲『清廉一徹』，277－288頁，秋山＝福島・前掲『津軽家の人びと』，注１）159頁，太宰（当時22歳）は，1930年１月18日，いわゆる「鎌倉入水事件」を起こし，心中相手の田部あつみ（19歳）を死亡させてしまう。太宰の方は一命を取り留めたものの，自殺幇助罪の疑いがかかる。文治（33歳）は，この時県会議員で八方手をまわし，修治を起訴猶予に持ち込んでいる。

　事態を重くみた文治は，この時県会議長あてに辞表を提出，金木で謹慎。辞表は議長の配慮でさし戻されたとはいえ，「長兄（文治）をそこまで追い込んだ償いは当然太宰も覚悟しなければ」，ならなかった（相馬正一『太宰治』〔津軽書房，1979年〕，61頁）。太宰の方も文治から分家除籍などを含めた仕打ちを受けている。文治は太宰を表向き，家から破門した形をとっていた。だが，太宰が1941年の帰郷，1944年の帰郷，および1945年の疎開の際には，近親者として恩情を示している。冷たくしていたのは，世間体をはばかったからだろう（鎌田・前掲『津軽・斜陽の家―太宰を生んだ「地主貴族の光芒」』，注１）267－268，279頁）。

7)『朝日新聞』1998年５月24日。

8) 津島＝東郷・前掲「太宰治と津島家の人々」，注１）48頁。

9) 福島常作『文治先生行状記』〔北の街社，1978年〕，25－26頁。

10) 津島＝東郷・前掲「太宰治と津島家の人々」，注１）43，46頁。

11) 津島康一「遠い景色の中にいる父」前掲『清廉一徹』，注２）271頁。

12) 同上，271－272頁。

13) 秋山＝福島・前掲『津軽家の人びと』，注1）228頁。
14) 鎌田・前掲『津軽・斜陽の家―太宰を生んだ「地主貴族の光芒」』，注1）255－256頁，太宰が中学４年の時の日記がある。その中で，文治について「どこまでも偉い兄なり」，との一節がある。太宰にとって文治は生涯頭のあがらない人であった，ということか（横山武夫「君が心根（こころね）何ぞ」前掲『清廉一徹』，201頁）。
15) 秋山＝福島・前掲『津軽家の人びと』，注1）227頁，康一は「それで未来もなにもなかったですね。……とにかく現状から出たいということで東京へ出てきちゃったんです」と，吐露（津島＝東郷・前掲「太宰治と津島家の人々」，注1）47頁）。また，大きな家（斜陽館）のことで，幼年期にいじめられ，「普通の子に生まれたかった」，とも述べ，それが芝居の世界への動機だ，と指摘している（同上，51頁）。
16) 津島文治は，「政治家の家庭に育ったものは，小さい時から政治家としての信条を知らず知らずの間に身につけているものであるから，大局において決して誤ることはないものである」と達観している（山崎竜男「報恩の期のないうちに」前掲『清廉一徹』，60頁）。

※本稿は，「青森県の初代民選知事・津島文治――『井戸塀政治家』の歩み」〔連載〕の一部であることをおことわりしておきたい。